

第四節 自餘の遺蹟

第五章 高句麗の古蹟

第一節 概観

第二節 將軍塚

第三節 大王陵、千秋塚等

第四節 一二の小石塚

第五節 五塊墳の土墳

第六節 牟頭墓塚

第六章 石塚及び土墳の年代

因みに頁七三、圖版六二、附圖一、挿圖二八、附するに錢稻孫氏の漢譯三八頁、英文紀要二五頁あり。(昭和十三年、日滿文化協會版、非賣品)(中村清兄)

蒙古學 第三册

その内容は、

内外蒙古の問題

蒙古の音楽について

遼の太宗北支進出の一考察

元明時代の質契約研究

蒙古喇嘛と民族運動

オルテンブルグ探検の回鶻文書

の五論文、一翻譯を、蒙古學講座として

矢野 仁 一

瀧 遼 一

田村 實 造

仁井田 陞

宮 城 良 造

エヌ・イェー・マロフ
江上 俊 夫 譯

匈奴およびその類族の迭興

蒙古の歴史 第二編

蒙古語文語楷梯

第三編

の二種を載せてゐる。

松田 壽 男
竹内 幾之助

「内外蒙古の問題」は、先づ清朝の對蒙古政策は、蒙古に對する清朝の主權を確保すること、蒙古人を支那人と隔離し、常にこれを清朝の味方として保留することに要約できるとなし、蒙古に對して主權を確立するには蒙古人の自治區である「旗」内の政務を、全く旗長である世襲の札薩克の專斷に委せず、之を制約すべき方針をとつたことを略述した。著者の言はんとする所は蒙古人を支那人と隔離して彼等を清朝の味方にしておくといふ、今一つの政策に在る。蒙古は明の時までは支那の敵國であり、清朝になつてから服屬した。それは清朝に服屬し清朝の君主を蒙古の可汗として奉戴したので、けつして支那に服屬したのではない。支那人が蒙古を支那の領土と考へるのは誤である。清朝は、蒙古の人民を支那人と隔離して滿洲朝廷の味方とし、支那に對抗せしめんとしたのであるが、それには蒙古人にその舊俗を維持させ、漢文化に感染しない様にし、又漢人の血液の混らないといふ方針をとつた。然るに、支那人は續々と蒙古へ移住し、又札薩克以下の蒙古の支配階級は支那人を招いて土地を開墾させ、貸與料又は小作料を負つたので、蒙古の人民は牧地を失ひ、牧畜にも差支へた。清朝は度々禁令を出してあくまでも蒙古人民の利益を保護し、富蒙にして支配階級たる札薩克らと對抗した。

ところが、光緒帝の時から、帝政ロシアの南下の勢力の壓迫を感ずる様になつたので、従來の方針を一變して殖民實邊の政策をとり、支那内地の人民を成るべく多く蒙古に移住せしめ、府州縣の制を施行し、宣統帝の時には支那内地の人民に對して、蒙古の土地の開墾を禁じた法令を正式に撤廢し、蒙古に漢文化を移入し蒙古を支那と隔離する政策をすてた。清朝が支那に對して蒙古の味方となるべき地位をすて、却つて支那の味方となり、支那人に蒙古移住を奨励するのは不都合であるといふことで、清朝滅亡の前年外蒙古は帝政ロシアの強援によつて獨立を宣言したのである。外蒙は清朝の滅亡を機として獨立したといふ通説は正しくない。内蒙古の獨立しなかつたのは、外蒙古とちがひ支那に接壤してその武力を蒙り易く、外國の援助もなく、内蒙古の王公は支那人移民から地代や小作料をとり、支那の商民とも深い利害關係を有し、經濟的に支那に依存する所が大であつたからである。滿洲帝國の建設により滿洲國內約百萬の蒙古人は地方自治權を認められたことは内蒙古の蒙古人に非常な刺戟を與へた。年々増加する支那人移民によつて生活を脅された彼等は、このまゝ推移すれば民族的に滅亡するほかはない。これ内蒙古の徳王を驅つて内蒙古の獨立運動を指導せしむるに至つた動機であるといふのが本篇の概要である。著者が從來近代蒙古史研究、近代支那史等に於て論ぜられた所を要約せられたもので、遊牧の民たる蒙古人の過去及將來を遠觀したところ、博士に非ざればなし得ない。本誌の卷頭を飾るに最もふさはしい作品であると信ずる。

「遼の太宗北支進出の一考察」矢野博士の論文が被治者の立場におかれた遊牧民に關する考説であるのに反し、これは遊牧民にして支那民族となつた場合の研究で、契丹族の國遼の太宗が北支に進出した經緯とそのこと自身が文化史上に及した意義をきはめんとしたものである。契丹は後晋の石敬瑭を援立してその報酬として所謂燕代十六州の地の割讓をうけ歳幣を得たのであつたが、次の出帝の代になると、兎角無禮な態度をとつたのでこれに憤慨してゐた所へ、中支に國を建てた南唐が契丹と結んで後晋を壓迫しようとする策動した。こゝに於て太宗は後晋征伐を敢行し、會同十年（九四七）晋都大梁（今の河南開封）に乘込み晋帝を降した。そして先づ親ら中國の衣冠を服し、百官の起居は皆前晋の遺制に従ふことを命じ、大赦を行ひ、中外の功臣勳戚の任命封爵を行ひ晋の遺臣をも重用したが、しかし彼等は中原の地に如何に統治するかといふ方針が立たず、生活様式の異なる彼等にとつては中原の地に腰をすゑることもできなかつた。將士は財寶を貪り、各地に鎮成せしめた契丹の近親は政事に疎く、父老郷紳の意を無視し徒らに内外の怨をかつた。契丹内部にも太后一派の反對があつて、太宗は自己の失敗を痛感しつゝ、歸國の途中に死んだ。太宗の北支進出は失敗に終つたが、太宗を始め幾多契丹の重臣が直接に政治の中心地に臨み、漢文化の洗禮をうけたことは燕代十六州の領有と相俟つて中原文物の契丹内地への移入を活潑ならしめ、殊に官職制度服飾儀禮方面に於ける華化の現象は著しかつたといつて、これを例證してゐる。建設時代に入つた今日、短篇ながらこの論文が我

々に教へる所は少くないであらう。たゞ遼代の儀衛を示す資料として使用してゐる奉天の國立博物館所藏の銅鐘は、果して關野・原田兩博士のいはれる如く遼代のものであるかどうかについては疑問を抱いてゐる人もある様である。

「元明時代の質契約研究」元明時代に於ける質契約文書に關する精密な研究である。動産質、不動産質、不動産抵當、人質の四つに分類し、元典章、通制條格、事林廣記に見える至元雜令、我が内閣文庫にのみ傳はるといふ新編事文類聚啓劄青錢、明律を始め、あまたの文獻を使用して契約文書の形式、内容の解明を試みてゐる。難解な史料を克明に判讀して當時の私法を復原した勞は、著者にとつては手慣れた事であらうが、驚くべきものである。たゞ引用の元典章記事に、陳垣の元典章校補を參照してゐない所がある様に思はれた。

「蒙古の音楽については、現在蒙古に於て行はれてゐる音楽は歌謡曲と合奏曲とに大別でき、歌謡曲の方が重要であるといつて、歌謡曲の歌詞と旋律を紹介し、樂器についても説明した概説的な讀みものである。

その他江上氏翻譯のマール著「オルデンブルグ探檢の回鶻文書」に見える息子質人の文書は、元初回鶻人の社會經濟生活の一面を物語つて興味があふかい。又「書評」欄に見える同氏紹介の Desmond Martin の「綏遠歸化城北方の景教遺蹟に關する豫備報告」は綏遠省百靈廟附近の景教遺物ののこつてゐる汪古部の遺蹟に關する注目すべきものである。蒙古史讀本の第二講は、史前時

代より五五五年端端が突厥に滅されるまでをとりあつかひ、蒙古語文語楷梯は第三講として動詞の説明である。

本號は内容豊富で鬱金色の外皮も快く、出来栄はよろしい。しかし發行があまりに不規則なのは感心できない。年二回の刊行は守つてもらひたいと思ふ。(菊判、二二〇頁、昭和十三年十二月、善隣協會發行、價壹圓五拾錢)(外山軍治)

中國疆域沿革史

(中國文化史叢書第二輯)

顧頡剛・史念海共著

本書が長沙で出版されたのは已に昨民國二十七年三月のことであるが、我々がこれを手にし得たのは漸く本年一月の半ば頃のことであつた。商務印書館の中國文化史叢書第二輯の中に顧氏の中國疆域沿革史の名が豫告されて以來、これを待望すること久しかつたのである。著者顧頡剛氏が現在支那古代史に於ける第一流の學者であり、又その多方面に亘る研究が夫々の分野に花々しい影響を與へてゐることなどは今更事新らしくいふ必要もない。略歴及び著述に就いては東洋史研究二卷六號に小川茂樹氏の解説されたものがある。(現代支那名家著作目錄の六)氏が歴史地理の研究に對して熱意を持たれるに至つたのは、比較的新しいことであるが、一流の科學的研究法を以て着々實績を上げ民國二十三年には兩漢州制考(慶祝蔡元培先生六十五歲論文集下冊)の如き名編を世に送つた。數年來萬頁半月刊を主宰して新進の專家を傘下に集め